

アクションリサーチを用いた研究の動向について

Trends in research using method of action research in Japan

吉本 和樹¹, 兎澤 恵子²

要旨

アクションリサーチを活用した研究は多くの医療現場で用いられているが、研究内容は多岐にわたり、研究の実態を把握するのが困難な状況である。そこで我々は、医学中央雑誌Web版を利用し、近年の医療分野におけるアクションリサーチの手法を用いた研究の動向を知ることを目的に本研究を行った。その結果、「教育」「保健医療」「高齢者」をキーワードとするアクションリサーチを活用した研究が2011年以降増加傾向にあることが明らかになった。ただし現時点で国内ではアクションリサーチの方法論はまだ開拓が不十分であり、研究者もアクションリサーチの手法を手探り状態で用いているというのが現状であることが示唆された。今後、国内においてアクションリサーチの手法を用いた研究が定着していくためには、「アウトカム妥当性、プロセス妥当性、民主的妥当性、触媒的妥当性」の4つの妥当性を常に意識しながら研究を進めていくことが望ましいと考える。

キーワード：アクションリサーチ, 高齢者, 地域, 保健医療, 教育

Action research, Elderly person, Community, Health medical care, Education

I. はじめに

「アクションリサーチ」は、Kurt Lewinが1946年に発表した「Action Research and Minority Problems」で初めて紹介されたと言われている。Lewinはアクションリサーチについて、社会を変化させることに挑む方法の一つ (Lewin, 1946) と述べており、多くの研究者が、社会や環境を変化させることを目的にアクションリサーチの手法が用いられてきている。アクションリサーチはその名のとおり、アクション (活動) とリサーチ (研究) の両方をさし、実践、研究、理論に橋を架ける研究方法 (筒井ら, 2010) で、実践的な研究だといわれている。研究者と実践者との密接な協働のもと、実践的課題に基づいた介入・支援を計画・実践して、その成果を分析するとともに実践に活かし、さらに実践の中から研究課題を見つけて再介入・支援を行うというような、実践と研究の密接な結びつき (錦戸, 2017) を前提とした研究スタイルを指している。

アクションリサーチを用いた研究は、臨床実践や教育の実践である特定の問題を明らかにし、その状況を改善する (ホロウェイら, 2000) ことから、

多くの医療現場で用いられており、近年ではその傾向が顕著である。しかし研究内容は多岐にわたることから、研究の実態を把握するのが困難な状況である。

II. 研究目的

本研究の目的は、国内最大の医学文献情報データベースである医学中央雑誌Web版を利用し、近年の医療分野におけるアクションリサーチの手法を用いた研究の動向を知ることである。

III. 研究方法

1. 文献検索方法

医学中央雑誌Web版を用い、「アクションリサーチ」に関する文献の検索を行う。

2. 分析方法

検索結果により得られた文献の情報から、「一般」、「会議録」、「会議録/事例」、「解説」、「解説/特集」、「原著論文」、「原著論文/事例」、「原著論文/特集」、「座談会」、「総説」に分類し、発行年を調べ、

1 Kazuki YOSHIMOTO 千里金蘭大学 看護学部

2 Keiko TOZAWA 千里金蘭大学 看護学部

受理日：2017年9月8日

アクションリサーチの研究の年次推移をみる。

医学中央雑誌に収録されている文献の情報には、論文の内容からシソーラス用語及びフリーキーワードと副次的キーワードおよびチェックタグワードが付与されており、これらのワードにより論文の内容について想起できる検索が可能となっている。したがって、本研究では、「アクションリサーチ」で検索できた文献に付与されているワードをすべてピックアップし、そのワードをカウントしたものを一覧表にする。

カウントしたワードで上位3位までのワードに関連するアクションリサーチに関する文献の内容を概観し、重要と思われる文献を抽出する。抽出した文献について、研究目的、研究方法、結果、考察から分類及び分析を行い、国内におけるアクションリサーチの動向と課題について検討する。

IV. 医学中央雑誌Web版での調査期間

2017年7月22日～2017年7月28日

V. 結果及び考察

1. 文献の年次推移

医学中央雑誌Web版を用い、1996年から2017年までの期間で検索語句「アクションリサーチ」のみで検索した結果、585件の文献が検索できた。検索語句「アクションリサーチ」単独で検索できる文献の種類は、会議録が252件と一番多く、原著176件、解説144件、総説7件、一般6件であった。

また、検索語句「アクションリサーチ」で検索された論文件数の年次推移をみると、1996年から2000年までは、9件のみであったが、2001年以降は文献数が増えはじめ、2001年から2010年までの10年間で220件、2011年から2016年までの6年間で342件であった（図1）。なお、2017年7月28日の時点で、医学中央雑誌に収録されている2017年分

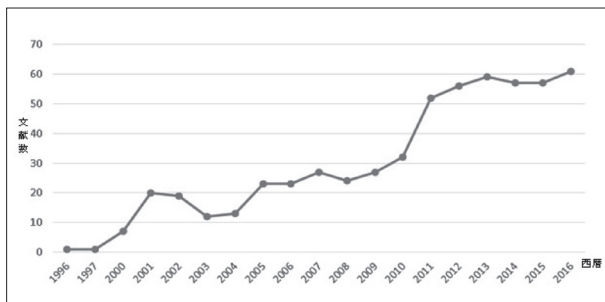


図1 アクションリサーチを用いた研究の年次推移

の「アクションリサーチ」に関する文献は14件であった。

2. 付与ワードのカウント結果

検索語句「アクションリサーチ」で検索した文献585件に対して情報として付与されている「医中誌フリーキーワード」及び「シソーラス用語」、「チェックタグ」にあったワードをすべてカウントしたところ、合計5690ワードであった。このワードについて、同一ワード及び、ほぼ同義と思われるキーワード等は一つにまとめて集計した結果、多かったのが、「教育」、次に「保健医療」、「高齢者」、「質問紙調査」、「成人期」、「意識/意識調査」の順であった（表1）。

表1 付与ワード数の結果

順位	ワード	ワード数
1	教育	253
2	保健医療	144
3	高齢者	124
4	質問紙調査	80
5	成人期	54
6	意識/意識調査	49
7	インタビュー	42
8	人間関係	40
9	チーム医療/チームナースング	38
10	半構成的面接	36
11	看護生涯教育	34
12	リハビリテーション	33
13	意識/意識性	31
14	がん看護	30
15	カンファレンス	29
16	在宅	29
17	糖尿病看護	29
18	現職教育	28
19	管理看護	28
20	災害対策	26

3. 付与ワード上位3位の論文の種類別分析結果

文献内容を想起可能にする方法としてカウントしたキーワードを論文の種類別に分類した。その結果、検索した585文献のうち、「医中誌フリーキーワード」及び「シソーラス用語」、「チェックタグ」に「教育」が情報として付与されていた文献は、155件であった。そのうち、原著が66件、会議録が58件、解説が31件であった。次に、「保健医療」が情報として付与されていた文献は、202件であった。そのうち、原著が42件、会議録が100件、解説が60件であった。また、「高齢者」が情報として付与されていた文献は、68件であった。そのうち、原著

が38件、会議録が23件、解説が7件であった。なお、付与されているワードは一つの文献に10個程度存在するものがあったため、同一文献に「保健医療」「高齢者」が複数の付与ワードとして与えられている文献も複数みられた（図2-4）。

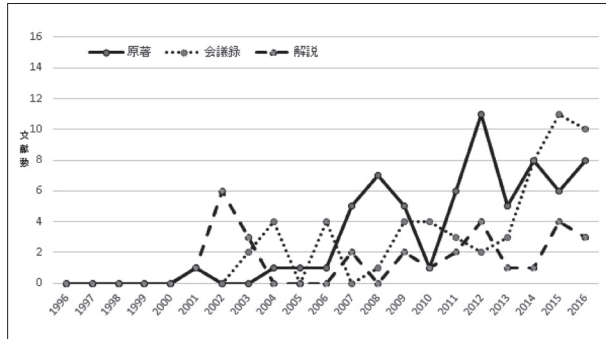


図2 付与ワード「教育」文献内訳と年次推移

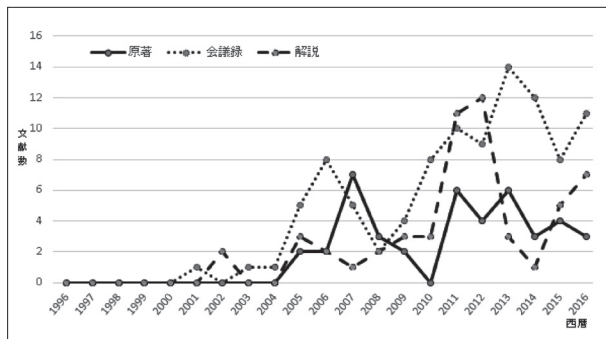


図3 付与ワード「保健医療」文献内訳と年次推移

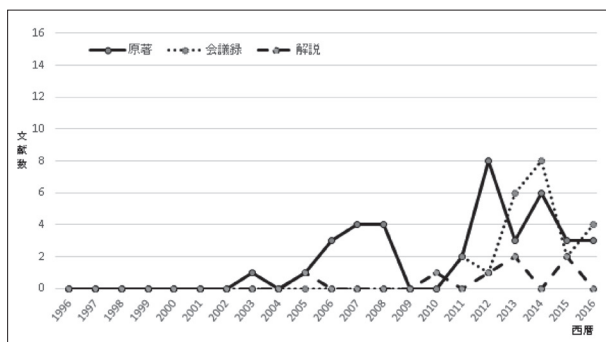


図4 付与ワード「高齢者」文献内訳と年次推移

4. アクションリサーチに関する原著論文の分類

医学中央雑誌Web版にて、「アクションリサーチ」and「教育」、「アクションリサーチ」and「保健医療」、「アクションリサーチ」and「高齢者」をキーワードとして検索した結果、アクションリサーチに関する原著論文は2011年及び2012年以降に増加がみられることから、2012年から2017年の原著論文に絞って検索した。分類の結果は「アクションリサーチ」and「教育」が53件、「アクションリサーチ」and「保健医療」が77件、「アクションリサーチ」and「高齢者」が29件であった。原著論文とし

て検索した合計159文献は、医学中央雑誌において「原著」として分類されていたが、実際に文献を取り寄せて内容を確認したところ、原著論文ではなく研究ノートや活動報告、資料などが大多数であった。また紀要の多くは、原著あるいは、研究ノート、資料という分類はされていなかった。したがって、医学中央雑誌で「原著」として分類されていた159文献の内容を確認し、論文の形式になっていない文献、アクションリサーチの方法・手法を用いて研究をしていない文献、医療との関連性が低い文献、重複している文献を除外し、最終的に28文献を抽出し今回の分析対象とした。

なお、抽出した28文献については論文の内容から、患者の支援に関連した研究、看護師のケアの質向上についての研究、地域住民・高齢者の社会参加にむけての研究の3つに分類した。

1) 患者支援に関連した研究について

長尾ら（2012）は、患者の医療への主体的な参加を促すことを目的に、アクションリサーチを用いて、患者参加型パスの開発・活用における患者と医療者の経験について明らかにしている。従来の糖尿病教育入院の医療者用パスを患者に開示することで、患者は、情報共有の有効性を認識し、患者もパスを活用していく価値があると考えようになった。また患者参加型パスの活用は、患者の主体的な医療への参加、医療者の情報共有に関する意識変化と患者の思いや考えに沿った医療の実践につながり、患者参加型医療の促進に有効であったと報告している。長尾らの研究は病院において行われたものであるが、地域に住む患者に対する研究も行われている。下地ら（2014）は、高齢の糖尿病患者同士が活動の意義を考える機会を持つことを目的に参加型アクションリサーチの手法を用いた。その結果、患者同士の活動の意義について、長い闘病生活で獲得してきた『生活の技』を語り合い、共有し、ケアしあいながら生活を工夫し、生活に広がりを持たせることであったと報告している。さらに蔭山ら（2012）は、精神疾患を患う家族の学習会において、担当者に参加型アクションリサーチの手法によって得られたデータを質的記述的に分析した。その結果、家族としての体験的知識や体験を通して得た考えを伝える技術の重要性について明らかにしていた。地域住民支援に関して本間ら（2014）は、生活習慣病予防プログラムの自発的参加者620名を対象に、アク

ションリサーチの手法を用いて、運動プログラム開始後4週間の経時的実施状況を調査した。その結果、運動プログラム開始後1週以内と週末に運動未実施者が多いということが明らかになった。そのことから継続的な運動実施率向上には、第1週目に焦点を当てた支援が有効であると報告している。また行實(2016)は、参加者が意欲的に活動できる地域支援をすることを目的に、参加型アクションリサーチの手法を用いた。その結果自分たちの行動の中にピアサポートがあると意識化されたことにより、普段の行動が受動的なものから能動的なものへと変化がみられたと述べている。

以上、長尾らの研究以外は地域で生活する人々を地域で支えていくために行われた研究であり、ヘルスプロモーション活動や、病気を抱えながら地域に暮らす人を支えることを目的にアクションリサーチの手法が用いられていた。

2) 看護師のケアの質向上についての研究について

伊藤ら(2014)は、新生児の清潔ケアの一つであるドライテクニック(DT)を導入する方法としてアクションリサーチの手法を用いていた。DTの問題点抽出のために、まず、助産師・看護師にアンケートを実施して問題点を抽出し、勉強会を行った。そして、DTを導入後にもアンケート調査を実施し、さらなる問題点も明らかになっていったという点でアクションリサーチの手法は問題解決及び業務改善のために有効であったと述べている。また内ら(2012)は、看護ケアとしての喘息指導を継続的に行うことを目的に、喘息指導を実施した看護師に対してアクションリサーチを行った。その結果、看護師はケアの導入前から喘息指導の必要性や重要性を常に意識し、他職種からのサポートを得るなどのアクションを起こしていることが明らかになったと報告している。また本吉(2014)は、小規模外来透析施設のスタッフに対して通院している透析患者のケア向上の方法を見出すことを目的にアクションリサーチの手法を用いた。その結果、グループワークを中心に展開したプログラムにより、現場の問題を改善し、スタッフの主体的・継続的な患者ケア向上への取り組みを促進することができたと報告している。

以上は直接患者に関係するケアを向上させるための研究であるが、他に病棟などのシステム改善のためにアクションリサーチの手法が用いられた研究もある。斉藤ら(2012)は、手術室における

勤務異動者への教育システム改定の取り組みとして、アクションリサーチの手法で研究を行った。その結果、新任者が初めて器械出しを行う際、プリセプターなどが一緒に器械出しに入り、指導・支援を行うというシステムの導入が新任者にとってもプリセプターにとっても有用であったと述べている。また翁長ら(2013)は、アクションリサーチの手法を用いてICUの看護師全員で課題に取り組む姿勢作りを目指した。その結果、経験年数の異なる看護師を対象とする習熟度別教育プログラム導入課程を通して、看護チームの活性化に寄与したことが報告されている。

また他に看護師の認識に変化を与えるための取り組みとして倉田ら(2014)は、一般病院での、パーソン・センタード・ケア等の理念を活用し不必要な拘束の減少を目的としたアクションリサーチを実施した。前後の質問紙調査から看護師の拘束行為およびその必要性への認識と拘束実施回数等の変化を検討した結果、必要性の認識に変化はなかったが、拘束行為の認識には向上がみられたと報告している。

臨床現場の看護師のケアの質をあげるための研究の中には、臨床現場の看護師の意識を変化させるために、1年以上の期間をかけて行われている研究もあった。市之瀬ら(2015)は、看護師にプレパレーションの必要性を感じさせ、そして行動を起こさせるために、アクションリサーチの手法を参考に1年間の教育的な関わりを行った。勉強会で看護師のニーズを把握し、事例検討会で振り返りと意味づけを行ったところ、子どもの反応を断片的に捉えるのではなく、プレパレーションのプロセスとして捉えることができるようになり、プレパレーションの必要性の理解を促すことが出来たと報告している。

アクションリサーチの手法を用いた研究は病院で勤務する看護師以外に、施設で働く職員においても用いられている。鈴木(2012)らは、介護老人保健施設において、「認知症ケアのアウトカム評価票」を使って、職員のケアの質改善のためにアクションリサーチの手法を用いた。その結果、職員の【その人への関心が深まる】、【丁寧な関わりになる】、【関わることの喜びや学びを実感する】といった肯定的な思いと【家族への働きかけが難しい】、【目が離せない認知症高齢者への対応方法の難しさ】、【介護業務の緊迫化】などの困難さを明らかにすることが出来たと報告している。

その他中尾ら（2016）は、慢性疾患看護専門看護師（慢性CNS）の実践知を明らかにするために、慢性CNS 6名を対象にアクションリサーチの手法で研究している。エキスパートナースの実践をもとにした分析を重ねた結果、慢性CNSは腎症2期の看護において、腎症の詳細について患者に伝えるタイミングを図ることが看護ケアの一つであると考えていることが明らかになったと報告している。このように、臨床で活躍するエキスパートナースの行動を分析し、その分析結果をもとに看護の質をあげていくための研究に対してもアクションリサーチの手法が取り入れられていた。

臨床現場の看護師だけで取り組むのではなく研究者が臨床現場の看護師と共に行う研究もみられる。草柳（2012）は、小児看護の立場から研究者と看護師が共に考える機会を創り出すことで、看護師の意識やケアにどのような変化が起こるのかについて明らかにするために、アクションリサーチの方法を用いて研究した。その結果、自分の看護を変化させるきっかけには、看護師同士で語り合いながらよりよい看護を実践していけるような支援が必要であるということを明らかにしていた。また善生（2013）は、退院調整事例の在宅移行期支援ニーズの構造を明確化することを目的に、研究者と看護師が協働して研究を行った。その結果、退院調整事例の在宅移行期支援ニーズは、「患者・家族支援」、「地域支援体制」、「病院組織」、「退院調整活動」による重層的な構造であることを明らかにしていた。また福良ら（2013）も研究者が現場の実践者とともに研究を行っている。福良らは、中規模病院の看護師らと共に「よりよい食事の援助」を目指して、アクションリサーチの方法論を用いて勉強会や研修会に取り組んだ。その結果「食事援助の再認識」「日常ケアへの内省」「ケア修正の模索」「チーム連携の芽生え」という変化が見出されたと述べている。

以上の研究のように、臨床現場において問題が生じているもしくは、解決したい課題に対して、看護師だけで取り組むのではなく、研究者が臨床現場に入り込み、看護師とともにアクションリサーチの手法を用いて問題を解決していく研究がみられた。

その他に、臨床現場で多職種が連携して行っている研究もある。星野（2015）は、長期入院している子どもと家族に対する復学支援体制作りにおけるプロセスの変化と関係職種の協働による支援

の効果を明らかにすることを目的にアクションリサーチの手法で取り組んでいる。その結果、長期入院する子どもへの復学支援プログラム作成の過程では、復学支援の流れや役割が明確になることで、子どもと家族のニーズに合った支援が可能になったと報告している。なお星野は復学支援の体制が作り上げられるプロセスにおいては、復学支援チームが促進や停滞を繰り返しながら徐々に発展していく様子がみられたという点も報告していた。また阿部ら（2014）は、看護師と理学療法士が連携して人工股関節及び人工骨頭置換術後の生活指導をする上での課題を明らかにするためにアクションリサーチの手法を取り入れた研究を実施した。看護師、理学療法士の意識や行動の変化について記述的分析を行った結果、他職種と協力して生活指導を行うことで統一した基準で患者のADLを評価し、情報共有をするための基盤ができたと報告している。またその一方で、他職種の業務の進め方や情報交換の方法に違いがあり、職種間の調整に課題があることについても述べていた。

3) 地域住民・高齢者の社会参加に関連した研究について

佐藤ら（2015）は、アクションリサーチの手法で研究者と住民が試行を積み重ね、その都度評価を行いながら地域の問題解決を進めていく取り組みを実施している。その結果、住民メンバーからみたプロジェクトの効果として、地域のつながりが広がり、自主活動の継続がみられるようになったと報告している。さらに課題として、参加者や関係機関を巻き込んだ運営や住民が楽しんで参加できるような魅力あるプログラムの必要性などをあげている。また宮前ら（2014）は、東日本大震災の被災地に暮らす女性メンバーを対象に研究者と対象者が共同して望ましい作業を展開することを目指して、アクションリサーチの手法で研究を行った。プログラムは、参加者へのフィードバックをもとに新たな作業を展開するというものであり、本研究により共同で作業を展開する際のプロセスが明らかになったと述べている。また安齋ら（2015）は、地域活動を企画・実施し、地域活動が自主化に至るまでのプロセスおよびその地域活動による影響を明らかにすることを目的にアクションリサーチの手法を用いている。介入当初は活動の実施に研究者の厚いサポートを要していたが、活動の成功などをきっかけに徐々に住民の力で活

動を行うようになったと述べている。さらに住民主体の地域活動は、専門家や行政などが時間をかけてサポートすることで地域活動として定着すること、そして参加者の社会活動や健康関連QOLに効果があることを明らかにしていた。また善生ら(2015)は、アクションリサーチの手法を用いて地域医療サービスを利用する高齢者および専門職の相互理解をめざして、質問紙による意識調査をおこなった。その結果、質問紙作成プロセスでは、専門職間及び専門職と住民等の相互理解のためには時間を経ることが重要だということを述べていた。

また、地域の活性化のために地域住民に対して役割を担ってもらい取り組みとして山本ら(2016)は、介護支援ボランティア養成事業のシステム化を最終目標として、アクションリサーチの手法でその基盤作りに取り組んだ。この取り組みにより、地域ボランティア養成プロセスの課題が明らかになったと報告している。また原井ら(2016)は、模擬患者養成プログラムを検証するためにアクションリサーチの手法を用いた研究を行った。プログラムは、他者のためという意識とボランティアを通じて何らかの知識や技術を身につけ、それらを発揮したいという意識への働きかけに結びついていた。さらにインタビューの結果から、他者との交流を新たに構築する場になっていたことが報告されていた。また佐藤ら(2014)は、住民が話会を通じて地域社会における高齢者の役割を見直し、その役割の実践を目指してアクションリサーチによる地域介入を行った。その結果、地域社会における高齢者に対する役割期待について、「子育てのサポート」「世代間交流」「親しい近所つきあい」「自治会運営」「美化活動」であることを明らかにしていた。そして、高齢者の地域社会への参加促進のためにもこれらの役割期待を高齢者が遂行できるように支える必要性が示唆されたと述べている。

その他、地域でサポートを必要とする人たちを支援していくために宮田ら(2014)は、高次脳機能障がい者の家族を対象とするサポートグループの変化を明らかにすることを目指してアクションリサーチの手法で研究を行った。その結果、患者会育成のプロセスについて、情報を求める時期、それぞれが道をつけていく時期、自分で決めた道を歩き出す時期、という3つの変化がみられたことを明らかにしていた。また亀崎(2012)は、養

護教諭が地域ネットワークづくりを推進し、協働での子ども支援を具体化する接近方法を明らかにする目的でアクションリサーチの手法を用いた。その結果、養護教諭が子どもの複雑な問題に関することへのためらいや、学校内外の関係者との関係づくり、問題共有に躊躇すること、地域や家庭の関係者から援助を引き出せないという困難に直面していることなどが明らかになったと報告している。

以上のように地域で暮らす人たちの問題解決をめざしたり、地域の交流を促進するためにアクションリサーチの手法が用いられていた。

5. アクションリサーチを用いた研究の課題

患者支援、ケアの質向上、地域社会参加促進などの課題や問題に対峙するためにアクションリサーチの手法が用いられているが、研究者が実際に用いていた方法やプロセスは様々であった。今回、分析対象とした文献の中には、研究者があるひとつの行動をとったことに対する変化を研究結果として報告しているものが相当数みられ、時間をかけて実施評価を繰り返しながら進められた研究は少なかった。芳賀(2016)が、我が国のアクションリサーチの手法を用いた研究について、「方法論的にも未開発であり、評価の方法も確立しているとはいえない」と述べているとおり、アクションリサーチの研究手法や研究プロセスは我が国ではまだ未定着だと思われる。したがって、研究者の多くはアクションリサーチの手法を手探り状態で用いているというのが現状であると思われる。

そのような状況の中、芳賀はアクションリサーチにおける研究活動のプロセスについて「アウトカム妥当性、プロセス妥当性、民主的妥当性、触媒的妥当性」という基準を紹介している。この4つの妥当性(Herr & Anderson, 2005)のうちの「アウトカム妥当性」とは、行動が研究中の問題の解決にどのくらい寄与したのか、そしてさらにその問題を捉えなおし更なる疑問を持つ段階へと行動が結びついているかどうかというプロセスが研究に包含されているかということである。次に「プロセス妥当性」については、研究のプロセスが、単純すぎたり偏見に満ちたりする解釈を避けるために、いろいろな見方や様々なデータを用いて検証しているかということである。また「民主的妥当性」とは、研究に関係した人たちが協力関係を取り、さらにその人たちの声がどのくらいリサー

チに反映されているのかということである。そして、「触媒的妥当性」については、研究が行われた場について参加者が理解を深めることで、その場を変えていこうとする参加者をどの程度方向づけできたかについての視点が研究に含まれているかどうかということである。芳賀が提唱するアクションリサーチの研究活動プロセスを用いた文献として、佐藤ら（2016）の研究があげられる。佐藤らの研究は地域高齢者の社会参加促進のプログラム作成までに3年2か月を要している。そして地域高齢者の意識と行動の過程を分析した結果、8段階の変化があったことを報告している。佐藤らは、一連の活動による変化に対し、迅速な結果の追求に重きを置かず、一連の活動が複雑に変化するプロセスの評価に主眼を置いている。これらのことから、佐藤らの研究は芳賀が提唱するアクションリサーチの研究活動プロセスを忠実に用いた研究であると思われる。

アクションリサーチの手法を用いた研究をする際に注意すべき点は、何かアクションを起こし、それに対する変化をすぐに結果ととらえてはならないということである。変化をすぐに結果だととらえてしまうと結果的に事例研究と変わらない研究となりかねない。したがって研究計画の段階で、アクションリサーチを用いた研究手法やプロセスが妥当なものであるかについても十分に検討する必要があると考える。

VI. 結論

国内の「教育」「保健医療」「高齢者」をキーワードとするアクションリサーチを活用した研究は2011年以降増加傾向である。ただし、研究方法については研究者の多くが手探り状態である可能性が示唆された。

今後、アクションリサーチの手法を用いた研究が定着していくためには、「アウトカム妥当性、プロセス妥当性、民主的妥当性、触媒的妥当性」の4つの妥当性を常に意識しながら研究を進めていくことが望ましいと考える。

文献リスト

阿部美穂, 常盤文枝. (2014). 看護師と理学療法士が連携して行う人工股関節及び人工骨頭置換術患者への生活指導の評価. 保健医療福祉科学, 3,

63-68.

安齋紗保理, 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 芳賀博. (2015). 地域在住高齢者・行政・研究者の協働により創出された地域活動が自主化に至るまでのプロセスとその効果 アクションリサーチを用いた取り組み. 応用老年学, 9(1), 4-18.

福良薫, 畠山加奈子, 岸本香代子, 西田孝子. (2013). 食事の援助に対する看護師の思いと行動の変化 アクションリサーチ法を用いた院内研修の有用性. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9(1), 35-42.

本間泰子, 荒木田美香子, 大井珠子. (2014). 生活習慣病予防を目的とした運動プログラムの短期的な実施率推移に関する検討. 保健師ジャーナル, 70(8), 700-707.

本吉美也子. (2014). アクションリサーチを用いた外来透析スタッフに対する学習プログラムの検討. 日本看護学教育学会誌, 23(3), 71-82.

星野美穂. (2015). アクションリサーチを用いた関係職種の協働による復学支援 長期入院している子どもの順調な復学を目指した支援. 千葉看護学会会誌, 20(2), 11-19.

原井美佳, 上村浩太, 坂東奈穂美, 貝谷敏子, 御厩美登里, 樋之津淳子, 河原田まり子. (2016). 市民参画型の模擬患者養成プログラムの開発 共に育み合う市民主体の学習の場づくりを目指して. SCU Journal of Design Nursing, 10(1), 19-29.

芳賀博. (2016). 地域におけるアクションリサーチへの期待. 老年社会科学, 38(3), 357-363.

Herr K, Anderson G (2005). The Action Research Dissertation; A Guide for Students and Faculty. 4, 12, 38, Sage, CA

ホロウエイ, ウィーラー (著), 野口 美和子 (翻訳), 伊庭 久江 (翻訳). (2000). ナースのための質的研究入門—研究方法から論文作成まで. 医学書院

伊藤沙織, 高村ゆりえ, 熊谷由果, 田中久代. (2014). ドライテクニック導入への取り組み アクションリサーチの手法を用いて. 盛岡赤十字病院紀要, 23(1), 60-68.

市之瀬知里, 内正子, 山本陽子, 二宮啓子, 石川愛, 佐野恵, 田中真咲. (2015). プレパレーションを病棟に定着させるための教育的試行による看護師の認識と行動の変化 小手術を受ける子どものプレパレーションに焦点をあてて. 神戸市看護大学紀要, 19, 35-43.

蔭山正子, 横山恵子. (2012). 精神疾患を患う人の家

- 族ピア教育プログラムにおける支援技術. 精神障害とリハビリテーション, 16(1), 62-69.
- 亀崎路子. (2012). 子ども支援の地域ネットワークづくりに対する養護教諭の接近方法. 千葉看護学会会誌, 18(2), 27-35.
- 草柳浩子. (2012). 子どもと大人の混合病棟で働く看護師の意識とケアの変化 アクションリサーチを通して. 日本看護科学会誌, 32(4), 32-40.
- 倉田貞美, 牧野公美子, 村上静子, 國井雪絵, 小杉山友里, 中村早希, 松井咲樹. (2014). 一般病院における認知症高齢者への不必要な身体拘束防止の取り組み 看護師の認識および身体拘束実施状況の変化に関する量的検討. 日本認知症ケア学会誌, 12(4), 763-772.
- Lewin, K. (1946) : Action research and minority problems. J. Social Issues, 2, 34-46.
- 宮前珠子, 山田美代子, 鈴木達也, 佐野哲也, 鴨藤祐輔. (2014). 東日本大震災被災地における意味ある作業の開発 岩手県T村T仮設団地S地区女性部メンバーを対象としたアクションリサーチ. リハビリテーション科学ジャーナル, 9, 39-48.
- 宮田孝子, 佐伯和子. (2012). A保健所で実施した高次脳機能障がい者の家族を対象とするサポートグループの参加者の変化. 日本地域看護学会誌, 15(2), 89-96.
- 長尾幸恵, 山本靖子, 安保真美, 近野千鶴, 蒔野恵, 正城奈美, 中田美樹. (2012). 患者参加型パスを用いた患者と医療者の診療情報共有による患者参加型医療の促進. 日本クリニカルパス学会誌, 14(2), 141-146.
- 錦戸典子 (2017) : 7 いろいろな研究デザイン(6) アクション・リサーチ、産業ストレス研究 24(2): 233-238
- 中尾友美, 小江奈美子, 永渕美樹, 桃坂真由美, 横堀裕美, 岡佳子, 島歌織, 古賀明美, 藤田君支. (2016). 慢性疾患看護CNSの実践知を活用した早期糖尿病腎症患者の看護. 木村看護教育振興財団看護研究集録(23), 68-84.
- 翁長悦子, 池田明子. (2013). ICU病棟における新任看護師の習熟度別教育プログラムの導入過程 参加型アクションリサーチ法を用いて. 沖縄県立看護大学紀要(14), 57-70.
- 下地幸子, 大湾明美, 佐久川政吉, 田場由紀, 野口美和子. (2014). 高齢糖尿病患者の主體的な参加による仲間との活動プロセスとその評価. 沖縄県立看護大学紀要(15), 1-16.
- 鈴木早智子, 内田陽子, 加藤綾子, 美原恵里. (2012). 介護老人保健施設における認知症高齢者ケアの質改善活動とそれに伴う職員の思い. 群馬保健学紀要, 32, 1-13.
- 齊藤美香, 萩野沙織. (2011). 手術室における勤務異動者への教育システム改定の取り組みとスタッフの意識の変化. 日本手術看護学会誌, 7(2), 231.
- 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 若山好美, 堀籠はるえ, 鈴木佑子, 岡本麗子. (2014). 地域社会における高齢者に対する役割期待と遂行のための促進要因 フォーカス・グループ・インタビュー法を用いて. 日本保健福祉学会誌, 21(1), 25-34.
- 佐藤美由紀, 安齋紗保理, 齊藤恭平, 芳賀博. (2015). 住民関与者からみた社会的ネットワーク形成を目指したプロジェクトの効果と課題. 応用老年学, 9(1), 100-112.
- 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 若山好美, 芳賀博. (2016). アクションリサーチによる地域高齢者の社会参加促進型ヘルスプロモーション・プログラムのプロセス. 老年社会科学, 38(1), 3-20.
- 筒井真優美, 江本リナ, 草柳浩子, 川名るり. (2010) : 研究と実践をつなぐアクションリサーチ入門—看護研究の新たなステージへ—, ライフサポート社, 東京
- 内正子, 二宮啓子, 辻佐恵子, 丸山浩枝. (2012). 小児科外来における患者・家族への喘息指導を通じた看護師の認識と行動の変化のプロセス. 神戸市看護大学紀要, 16, 39-47.
- 山本加奈子, 村田由香, 眞崎直子. (2016). 陸前高田市における介護支援ボランティア養成の試み. 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 11-20.
- 行實志都子. (2016). 精神障害者ピアサポートを使った地域づくりの一考察. 神奈川県立保健福祉大学誌, 13(1), 45-52.
- 善生まり子. (2013). 退院調整事例の支援ニーズの構造 在宅アクションリサーチを通して. 埼玉県立大学紀要, 14, 13-26.
- 善生まり子, 菅野康二, 久保田亮, 戸田肇. (2015). 高齢者の地域医療サービス意識調査における質問紙作成プロセス 専門職討議と住民ヒアリング. 埼玉県立大学紀要, 16, 13-20.